

神功皇后伝承

— 肥前から壱岐へ —

吉田修作

序

旧稿で神功皇后伝承の三段階として、古代の古事記、日本書紀、風土記における伝承の生成、平安・中世の八幡信仰の隆盛を背景とした伝承の変容、近世における国学や神道研究に伴う土地の伝承の見直しという三つの観点から、主に北部九州地域の当該伝承を考察した^①。本稿ではその続編として主に第二、第三の観点を中心として、肥前・壱岐の地域に見られる神功皇后伝承を取り上げる。

一、玉島神社と鏡神社

古事記、日本書紀、風土記の伝えるところによれば、神功皇后は仲哀天皇崩御後、新羅征討のため、筑紫香椎宮を経て西行し、肥前松浦にて鮎釣りの占いを行ったという。その鮎釣りの場所は、古事記が玉島河の磯、日本書紀、肥前風土記が玉島河の石とあり、万葉集にその石を詠んだ山上憶良の次のような歌が見られるから、万葉集時

代に既に伝説化されていたようだ。

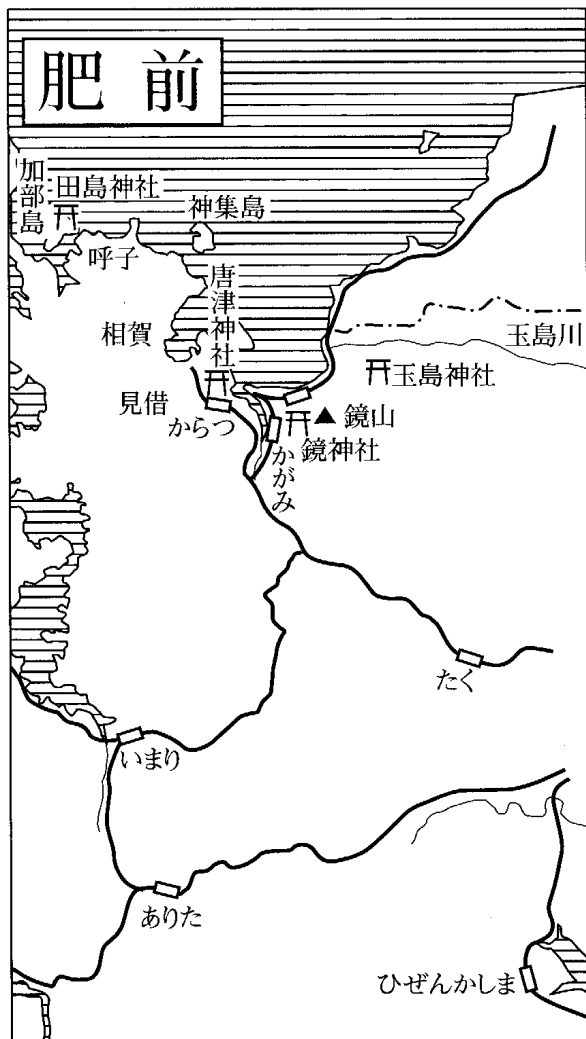
帶日売神たらしひめの命みことの魚釣なまらすと御立みたしせりし石を誰見たれき（一に云はく、鮎釣ると）（5・八六九）

尚、古事記伝には土地の言い伝えとしてその石を紫石と称すとし、別に紫台石、皇后石、垂綸石などとも呼ばれている。その石の左岸の丘に皇后を祭る玉島神社があり、当社の由緒によれば、創建は宣化天皇の代、大伴狭手彦新羅討伐の時と伝える。これは事実というより、この近辺は大伴狭手彦と松浦佐用姫の伝承地でもある故に、神功皇后と狭手彦の二つの伝承が結び付けられた結果によるものと考えられる。また、土地の伝承によれば、皇后は朝鮮出兵のため軍を進め、この地で干珠・満珠の二宝を得たので玉島の里というのだとする地名起源説明もある⁽²⁾。更に、浜玉町史によれば、昔は聖母神社しようもと称していたが、江戸時代の土井氏の時に玉島神社になったとの説もあるという⁽³⁾。

干珠・満珠は古事記、日本書紀、肥前風土

記という古代の文献に見られず、八幡愚童訓などの八幡縁起に記述されており、また、神功皇后を聖母と称するのも八幡信仰の中で醸成された呼称であるので、右の玉島神社の祭神や伝承は中世以降のものと考えられる。聖母神社については別に後述する。

玉島川は古くは松浦川とも呼ばれ、万葉集巻五の松浦河に遊ぶ序と歌群の舞台としても知られる。万葉集では神仙的に歌われているものの、をとめの鮎釣りが題材に



なっており、それらは古事記、日本書紀の神功皇后伝承とともに土地の習俗を踏まえていることは想像に難くない。その玉島川（松浦川）に近接してこれも万葉集巻五に歌われ著名となった松浦佐用姫の領巾振山は、別名鏡山とも称され、その西山麓に位置する鏡神社には神功皇后が祭られている。当社の社記によれば、神功皇后が朝鮮出兵の際し、その山に宝鏡を捧げて戦勝祈願したことから鏡山と名付けられたという。一方、豊前風土記逸文に福岡県田川市鏡山の起源説明に同様の伝えが記されており、地域的に離れてはいるが、影響関係があると考えられる。肥前の鏡神社の方では、鏡を御神体として齋祭した所が一の宮で、奈良時代の創建と伝え、鏡大明神とも、香椎宮に対し正松浦宮、松浦廟とも称された。吾妻鏡の文治二年（一一八六）十二月十日の条に、草野永平を鏡社宮司職に定め、相伝を任じたことが見える。草野氏は鬼ヶ城（現唐津市浜玉町）に居住し、草野鎮永が豊臣秀吉から所領を没収されるまで鏡神社の大宮司を勤めたという。尚、明和四年（一七六七）に大宮司が記した鏡宮諸事情覚帖によれば、「別当社僧或ハ修験等奉仕之社」とあり、当時、修験者が関与していたことは注目される。

寛政元年（一七八九）成立の松浦古事記なる書物では、「鏡大明神一ノ宮之事」として、主に日本書紀を基に神功皇后の事績を記しつつも、先の鏡神社のように日本書紀にない土地の伝承を加えているのだが、鏡神社に続いて次のような記事を記す。

暫く此所にまし／＼諸国に詔命し船を集め、兵甲を練らしめ玉ふに、軍つどひがたし、皇后宣はく、是必ず神の御心ならんとて、則ち浜辺にわたらせ玉ひ、潮を結はせられ、天に向ひて祈り玉ふ。其跡今唐津大明神の靈地なり。

右の唐津神社の由来は勿論日本書紀には見られないが、神功皇后撰政前紀に類似する部分はある。

秋九月の庚午の朔にして己卯に、諸国に令して、船舶を集へ兵甲を練らふ。時に軍卒集ひ難し。皇后の曰はく、「必ず神の御心ならむ」とのたまひ、則ち大三輪社を立てて、刀・矛を奉りたまふに、軍衆自ら聚る。

日本書紀では大三輪神社（現福岡県筑前町弥永）の由来として語られているが、松浦古事記では、それらを換骨奪胎して唐津神社の由来としている。当然のことながら松浦古事記の内容は根拠のない捏造ではあり得ず、土地の伝承に根ざしているはずであるから、この松浦古事記の記事からは、日本書紀などを基にその注釈のような形で土地の伝承が新たに生成していく過程の一端が垣間見られる。

二、神功皇后伝承と肥前の古代の交通路

唐津神社は一宮に住吉三神、二宮に神田五郎宗次を祭り、松浦古事記、松浦拾風土記（文化年間成立）、佐賀神社誌要（大正一五年）などには、先の神功皇后伝承ともに、神田五郎宗次なる人物の事績が記されている。それらによれば、孝謙天皇の天平勝宝七年（七五五）九月、地頭神田宗次が霊夢によって海上に一宝鏡を得、神功皇后の捧げられたものであろうと奏上し、勅によって唐津大明神の号を賜ったという。この伝えに対して、唐津市史では、中世以降松浦党の一豪族として活躍した神田氏が、土地の神功皇后伝承に神田氏の祖先神的宗次の事績を合わせた神話と想定しているのは的を得ている。このような神社縁起にも土地の神功皇后伝承が影響を与えている。

唐津市には他にも神功皇后伝承が残存する。西寺町の熊野原神社の縁起は佐賀県神社誌要によれば、次のように伝える。神功皇后が新羅出兵の折、霧が深かったので、神に祈念すると十二条の神火がこの地の松原上空に懸かって霧が晴れ、船は無事神集島に到着した。よってこの地に祠を建て不知火神社と称した。後の天武天皇の代に悪疫流行した際に、十二羽の白鳥が現れて疫病が止んだ。白鳥は熊野大神の化身とされ、以後熊野原神社と改名したという。⁽⁸⁾ 船での航行中に火を見たというのは、日本書紀、肥後風土記に見られる景行天皇による火の国命名の話や、肥前風土記賀周里の霞で辺りが見えないという伝承にやや類似しており、後半は熊野信仰の影響下に生成した伝承

と思われる。当社のことは松浦拾風土記の山伏両派名寄に「熊野原権現 熊之原山龍清坊」とあり、いつの頃か紀州熊野神社系統に属したようだ。唐津市史によれば、神官は彦山派の山伏で、還俗して久田氏と称し、現在においてもその一族が神官を継承しているという。このように、神功伝承が修験の信仰を通して伝えられた点も注目される。

続いて唐津市街西部に見借みるかしという地名があるが、肥前風土記に地名の由来が記されている。肥前風土記松浦郡賀周里すに、景行天皇が土蜘蛛ミルカシヒメを誅した時、霞で物が見えなくなったので霞の里ともといった、今は賀周と訛つたとある。霞による地名起源の話だが、延喜式によれば、古代の松浦郡役所から西の登望とも駅へ向かう官道に賀周駅が見られ、ミルカシヒメに由来する地名としては、中世文書松浦廟宮先祖次第並本縁起に見留加志庄がある。続いて、肥前風土記賀周里の西の逢鹿おうか駅には、神功皇后が新羅出兵の際にこの所で鹿に出遇ったから遇鹿（逢鹿）となつたという文字表記に由来する地名起源が記されている。延喜式にも逢鹿駅名が確認されるが、江戸時代の松浦古事記によれば、神功皇后が朝鮮出兵の帰途、この地の沖で戦勝を「おおがせよ」と発した語から、相賀おうかの名が起こつたという。これは現在の地名表記相賀に因む新たな地名伝承であろう。景行天皇と神功皇后の巡行伝承は九州各地に分布しながらも、地域的に重層することはないが、右の賀周里と逢鹿駅はその二つの巡行伝承が隣接していることを示している。

見借みるかしの地域はかなり内陸に入り込んでいるが、佐志川の上流に位置し、佐志川を下れば海に面した佐志の地に至る。佐志は賀周（見借）と逢鹿（相賀）の中継地点に相当する。松浦古事記には、唐津神社から

賊の国を差して征せんと、道すがらよるこび玉ふところを指村と名付けぬ。今は佐志の二字とはなりぬ。

というように、神功皇后伝承を地名起源として記している。佐志川の左岸に八幡神社があり、佐賀県神社誌要によれば、次のようにある。康和三年（一一〇一）鎌倉権五郎景政が九州下向に際し、石清水八幡宮の分霊を勧請した、

また一説には、神功皇后が朝鮮出兵の時（或いは凱旋の時）、この地で鉾を納めて天神地祇を祭ったという。鎌倉権五郎景政下向は史実とは言い難いが、かつて柳田国男が説いたこと(9)を参考にすれば、御霊信仰を携えた修験などの関与が想定される。現宮司宮崎春香氏の岳父は英彦山で修行した山伏であったという。この地域の神功皇后伝承は、外部からの八幡神社の流入が生成の契機となった事例である。

一方、万葉集卷十五に記述された天平八年遣新羅使人等の航路も、神功皇后新羅出兵伝承を考える契機になり得るが、肥前国松浦郡狛島亭における歌群の中に神功皇后を詠み込んだ歌が見られる。

肥前国の松浦郡の狛島こましまの亭とまりに船泊せし夜に、遙に海の浪を望み、各々旅の心こゝろを働いたましめて作れる七首(の一首)

足姫御船泊たらしひめみふねてけむ松浦の海妹いもが待つべき月は経につつ(三六八五)

右の歌の歌われた狛島亭は所在不明とされるが、狛島は柏島の誤字で唐津湾の西に位置する相賀の北、湊町の沖合いの神集島かしわじまとする説が有力である。松浦古事記には次のようにある。

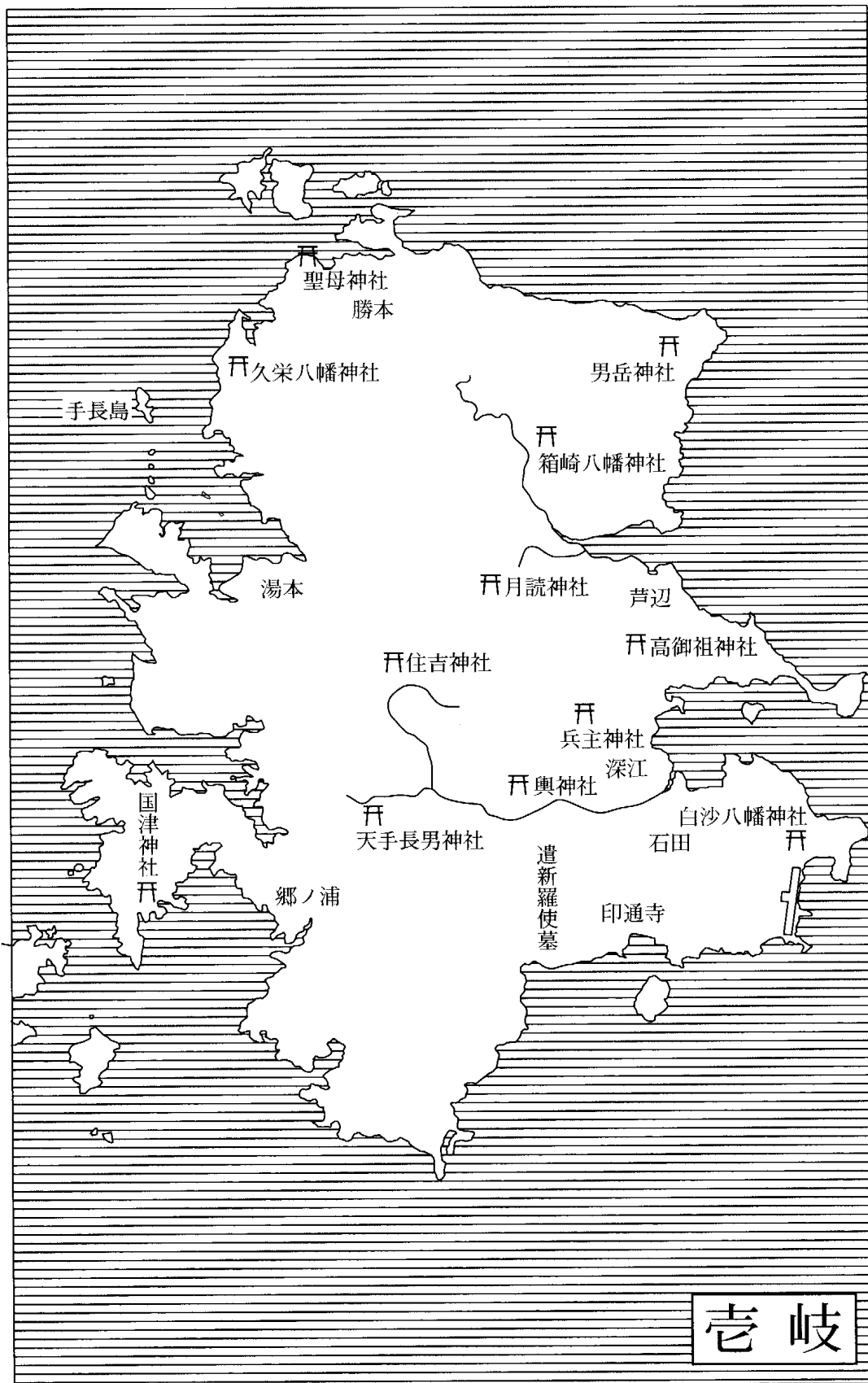
神功皇后が朝鮮出兵の時、住吉大明神の顕れたこの神集島に渡り、依網吾彦男垂見よさみのあびこたるみを神主として神を祭った、そしてこの島に軍神を集めて豊の明かりを催したので神集島と号したという。続いて吾瓮海士人烏麻呂あへのあまびとおまろという者を西の海に出して国を見させたところ、西に国見えずと訴えた。先の酒宴の時、かわらけを流された所を土器崎という。そこで総軍勢を整え和珥津わにつから船出された。今の湊浦の浜である。(10)

右の依網吾彦男垂見を神主にしたこと、吾瓮海士人烏麻呂を偵察させたこと、和珥津から出発したことは日本書紀に記されているが、それらを基に、神集島名など土地の伝承に根ざしたものを取り混ぜて語られている。但し、土器崎（ドキザキともカワラザキともいう）は神集島対岸にある湊町北方の岬の突端に位置し、和珥津は対馬の北端鰐浦を指すというのが一般的な理解であるが、ここでは日本書紀を援用しつつ、土地独自の伝承が生成されている。

神集島は朝鮮、大陸との航路上の寄港地とされ、頭陀親王入唐略記には、貞観三年（八六一）九月「更移肥前国

松浦郡之柏島」と記されている。神集島には住吉神社が現存し、その縁起によれば、神功皇后が朝鮮出兵の時、この島に神々を集め、干珠・満珠を納めて海上安全を祈ったという。先の松浦古事記と同様神集島の表記を基にした伝承で、ここにも干珠・満珠とあるように八幡愚童訓などの影響が見られる。当社は、元禄七年（一六九四）に島の弓張山に鎮座していたのを島の南西宮崎の現在地に遷宮したとされ、干珠・満珠と伝える神宝を蔵し、境内には蒙古襲来の際の蒙古礎石と称されるものもある⁽¹¹⁾。朝鮮・大陸との交通路に相当する地域は元寇の故地でもあるのだ。

肥前風土記には先の逢鹿駅に続いて登望^{とも}駅の由来が記されている。それによれば、神功皇后がこの地で男装した時に、身に付けていた鞆が落ちたので鞆の駅といったと、これも地名起源として語られている。この登望駅は延喜式の駅名にも見られ、東松浦郡呼子町大友・小友地域説、呼子港対岸の殿浦説、呼子一帯の船舶地説などがある。いずれにせよ、呼子港は古代から朝鮮・大陸の交通路として知られ、中世には倭寇の根拠地、近世においては沿岸廻船の船舶地として賑わい、現在でも壱岐との航路がある。記紀の神功皇后の記事には松浦の地名のみで、如何なる航路を辿ったかは具体的に記されていないもの、肥前風土記の伝承、万葉集卷十五の遣新羅使人等の航路、延喜式の駅名などから推測することが可能となる。というよりも、実際に九州北部から朝鮮へ向かう古代の交通路に沿う形で、神功皇后伝承が生成されていたと言った方が適切である。尚、中世の佐用姫神社記別記に、松浦佐用姫が朝鮮に赴く狭手彦の名を呼び慕ったことにより、呼子の浦といったという地名起源を伝える。先の鏡山が佐用姫と神功皇后の両方の伝承地であったと同様、朝鮮へ向かう両方の伝承が同地域で語られているのは、伝承の生成を考える上において示唆的である。



老 岐

三、壹岐聖母神社と古代の交通路

松浦古事記では、神功皇后の軍勢は先の和珥津から壹岐へ渡り、新羅も程近いということで、異賊に勝せ給うたので勝本と号したとの地名起源で続けていく。勝本は壹岐の北端の港町で神功皇后を祭る聖母神社が鎮座する。当社の縁起は大部のものが現存し、その奥書によれば、暦応元年（一三三八）に吉野末茂が古伝本を縫写したとある。それは主に日本書紀に依拠するが、次のように記されている箇所がある。

仲哀天皇の代に異国から塵輪という鬼神が襲来し、日本の人民を取り殺したので、天皇は長門豊浦で安部高丸・助丸に門を守らせて塵輪を迎え撃ち、天皇の放った矢によって塵輪は退治されたが、流れ矢が天皇に当り、天皇は崩御されたという。¹² 日本書紀の記載によれば、仲哀天皇崩御の原因は神の言葉を理解しなかったからというのが一般的だが、書紀の一に曰くに、熊襲との戦いの際に流れ矢に当たったことによるとの記述も見られ、右の縁起は一つにはそのような異伝を下地に行っていると見える。それを含めて、右の塵輪のことは勿論日本書紀には見られないので、神道大系の当縁起の解題には、如何なる資料に拠ったものか不明としているが、鎌倉時代後期成立の八幡愚童訓には塵輪のことがほぼそのまま記されていることから、壹岐聖母神社縁起が八幡愚童訓などを踏まえて書かれたことは疑いない。

塵輪という鬼を退治したという伝承は各地に散見する。山口県下関市の忌宮神社で旧暦七月七日に行われる数方庭と称される祭りの由来に、塵輪退治の末にその首を埋めた所を鬼石と呼び、神功皇后の三韓出陣や凱旋の際に鬼石の周りで勇壮な舞技を行ったことが始まりだと伝える。この祭りは七夕行事の一種であるが、その鬼石の周りを女性は切籠の付いた笹を持って廻り、続いて男性が一人ずつ太い竹で出来た大幟を両手で抱え持つてその力を鼓舞するというものである。又、福岡県久留米市三潴町大善寺で正月七日に行われる鬼追い行事の一種の鬼夜では、昔、

異国から襲来した沈輪という鬼神を退治したことに由来すると伝える。沈輪という鬼の名は塵輪の訛化と思われ、これらの鬼神伝承は八幡愚童訓を下地に行っているのは間違いない。記紀の神功皇后は、新羅に金銀財宝があるとの神の託宣に従って新羅出兵したと記されているが、右の八幡愚童訓などでは、鬼神によって攻撃されたことで、その報復として新羅などに向ったという合理理解がなされており、元寇の影響を受けたものと考えられる。

そのように壹岐聖母神社の縁起が、日本書紀とともに、元寇を契機に鎌倉後期以降、各地に広がった八幡愚童訓などの八幡縁起を基にしていることは、続く安曇の磯良を舵取りとするという部分にも見られるが、その後は次のように展開する。

皇后は群臣を集めて宴を設け、土器を島の頂上に棄てたので、その島を神集島、土器を棄てた所を土器崎という¹⁸と記す。この記述は先に見た松浦古事記の神集島などの伝承と重なる。次に壹岐に渡った後に、西の向かい風が吹くので、皇后が風神を祈ると東風に転じたので、喜ばれてその地を風本と名付けたという。そして、そこから対馬を経由して新羅を征服し、帰途に壹岐風本に戻った時、歓喜して勝鬨を挙げたので、風本を勝本と改め、暫くそこに留まった、それが香椎聖母宮であるという。

これもこの土地独自の伝えだが、香椎という名が冠されていることから、当社が筑紫香椎宮と繋がっていたことを表している。そのことは、当社の現宮司吉野宏一氏のご子息によっても確認し得た。須永敬は、九州南北部に¹⁹おける聖母神社の調査により、各地の聖母神社が筑前香椎宮の荘園であったと指摘しているのは興味深く、壹岐聖母神社もその一類とみなされる。但し、須永が、香椎宮の荘園であった聖母神社を石清水八幡宮や宇佐八幡宮と別系統とするのはどうかであろうか。前述したように、壹岐聖母神社縁起が、石清水八幡宮の神官の手になるとされる八幡愚童訓を下敷きに行っていることは、信仰や伝承のレベルにおいて、石清水八幡宮、宇佐八幡宮に対して、聖母神社、香椎宮というような明確な系統の区別があったか否かは簡単には言い難い。

ところで、壱岐聖母神社のある現勝本は、和名抄には郷名として風早（風本とも）、可須という地名で記されている。壱岐名勝図絵によれば、可須村の街道の西が風早、東が可須といい、可須は香椎からきたとする。また、延喜式兵部省諸国駅伝馬条に見える伊周駅は当郡に置かれた可能性が高いという。延喜式の駅名によって古代の交通路を想定すると、肥前から壱岐には、今の呼子と印通寺の航路を経て、壱岐の東南の優通駅（現印通寺）から陸路で国府に至り、更に北上して伊周駅のある可須郷（現勝本町）より船で対馬に向うというもので、古代においても同様であったらうことは、万葉集卷十五の遣新羅使人等の旅程や遺跡から判断される。

先に触れたように、遣新羅使人等は現唐津市神集島に相当すると思われる肥前狛島に停泊して歌作をなしたが、次に壱岐に至る。周知の通り、万葉集によれば、当地で一行の中の当地出身とされる雪連宅満が鬼病により死去し、遺体は石田野に葬られたという。その墓は印通寺に程近くの現石田町池田東触に遣新羅使墓碑として現存する。この墓の位置からして一行は優通駅（現印通寺）を経由したと考えられる。優通は延喜式兵部省諸国駅伝馬条に壱岐国二駅の一つとして見え、読みはユズ、ユウズ、インツなどの説がある。万葉集の表記から壱岐は当時ユキと訓じられていたことから、日本歴史地名大系では、優通はユキツ、つまり壱岐津であったらうと推測している¹⁴。

四、壱伎氏と神功皇后伝承

万葉集卷十五の雪連宅満への挽歌には、航海中に壱岐の海人が占いを行ったと歌われている。

わたつみの 恐き路を 安けくも なく悩み来て 今だにも 喪無く行かむと 壱岐の海人の 上手の占
 を かた灼きて 行かむとするに 夢の如 道の空路に 別れする君（三六九四）

右の占いは宅満自身の行為で、宅満は卜部としての役割を担っていたとする見解があるが、卜占を司った伊伎氏

は直姓で、連姓壹伎（雪）氏は渡来系氏族として書記、通訳の任に当たっていたとする説もある。或いは、卜占と書記、通訳を兼務していたという可能性もあり得る。いずれにせよ、壹岐直と壹岐連は後には同族と見なされ、山城の松尾社家伊伎系図に宅満は宅磨と表記され、従五位上宮主、月読宮長官、伊伎嶋司などと、壹岐卜部の系統に位置付けられている。宅満の父古磨は大宝二年（七〇二）遣唐使の一員として渡唐し、帰朝したことが続日本紀の慶雲四年（七〇四年）条に記され、また、詩にも優れ五言詩が懐風藻に一首取られている。又、宅満の子の益麻呂は天平宝字六年（七六二）遣渤海副使に任じられたというように、伊伎（雪）氏は代々対外交渉に関わるとともに、その一族の伊吉博徳が日本書紀に引用される伊吉博徳書を著すなど、書記としても重要な役割を担っていた。因みに、新撰姓氏録では左京諸蕃上に伊吉連はその出自を長安人劉家楊擁とし、渡来系氏族と区分されている。

一方、応神紀九年四月条に、壹伎直の祖とされる真根子まねこに関する記事が見える。それによれば、筑紫に派遣された武内宿禰が、天下を望んでいるとの弟甘美内宿禰うまみうちのの讒言により殺されそうになった時、真根子が武内に容姿が酷似していたとのことで、自ら進んで武内の身代わりとなって死んだと伝える。松尾社家伊伎系図によれば、真根子は母が武内宿禰の妹とされ、神功皇后の時、父雷いかづち大臣とともに三韓に赴き、帰途壹伎嶋に留まり三韓の守りに任じ、その子孫は卜部、或いは壹伎と称し、壹伎直氏の祖とされたと記す。この伊伎系図の記述は日本書紀に見られないもので、後に作られた伝承と考えられるが、ここで注目されるのは、壹伎直の祖が武内宿禰と雷大臣双方の系統を引くと位置づけられていることである。日本書紀においては、武内宿禰と雷大臣に相当する中臣烏賊津使主いかづつおみは、従者が主人公の事跡を語る役割を担うというのが類型として認められており、その従者の系統を引くとされた壹伎直一族が、壹岐における神功皇后伝承にも深く関与していたことは容易に想定される。

新撰姓氏録右京神別上においては、壹伎直は天兒屋命九世孫神雷大臣の後とし、先の伊吉連とは系統を異にする

一族と類別されている。雷大臣は前述のように、中臣烏賊津使主のこととされるから、ここでも壹伎直は中臣氏に繋がる氏族と位置付けられている。因みに、新撰姓氏録によれば、津嶋直も壹伎直同様雷大臣の後とあり、実態は別にして、系譜上は壹伎直と津嶋直が同族と扱われていたことを示している。雷大臣は尊卑分脈に、仲哀天皇の代、大兆の道を習って、亀卜の術に達し、姓卜部を賜い、其事に供奉したとある。或いは、松尾社家系図では、雷大臣について、中臣、大中臣、卜部、伊伎、藤原等の初祖で、神功皇后の代に、四大夫の内随一、仲哀天皇に仕え亀卜を業とし、本姓中臣を改め卜部姓を賜る、これ卜部姓の初めなりと記す。いずれも、記紀、風土記、八幡愚童訓などには見られない記述だが、雷大臣を亀卜を執り行う卜部の祖と伝えている。

又別に、壹伎県主の祖に関する記載が日本書紀顕宗三年二月にある。それによれば、阿閉事代あへのことしろが任那に派遣される際、月神が人に憑って祖高皇産霊たかみむすひのみことの功績を称え、自らを祀ることを要求したので、そのことを奏上、月神を山城葛野郡歌荒櫛田あらすだに奉納し、壹伎県主の先祖押見宿禰おしみのが仕えたという。これらの神は延喜式神名帳に見える壹岐島壹岐郡月読神社、同郡高御祖神社、山城国葛野郡葛野坐月読神社に対応する。月読命を祀るという点においては、壹伎県主は伊吉連に近い。

更に、三代実録貞観五年(八六三)九月七日条によれば、石田郡人宮主外従五位下卜部是雄と神祇権少史正七位上下部業孝が伊伎宿禰の姓を賜り、ともに其先出自雷大臣命也という。同十四年の伊伎宿禰是雄の卒伝には、始祖は忍見足尼命とあり、前述の顕宗紀の記載、壹伎県主の祖押見宿禰と符合する。是雄の卒伝は続けて、始祖以来代々亀卜を行い、是雄はその道を最も究めた者で、東宮宮主を経て、皇太子即位後転じて宮主となったとある。つまり、壹岐卜部16は天皇直属の宗教実践者であったのである。

是雄に限らず、壹岐卜部が中央において重要な役割を担っていたことは、養老令職員令、延喜式臨時祭に、二十人からなる卜部のうち壹岐五人、津嶋十人を採用すると規定されていたことから分かる。壹岐卜部のルーツは弥

生時代にまで遡り、壱岐のカラカミ遺跡、原の辻遺跡からは猪と鹿の肩甲骨の卜骨が、古墳時代の勝本串山ミルメ遺跡からは亀卜甲一七点が出土し、魏志倭人伝などに記述された卜占が裏付けられる。それらの習俗を継承した壱岐下部は対馬下部とともに、鹿卜、亀卜の実践者として中央で用いられたのである。

壱岐下部のその後の消息については、吉野家所蔵の吉野文書に記されており、それによれば次のようである。後醍醐天皇が吉野に行宮を建てた時、臣下の佐々木淡路守率いる軍兵の多くは社家、山伏、僧侶の輩であった。淡路守はその勲功により、皇居に因みて吉野氏の姓を賜わったが、その後の敗戦でその子とともに筑紫に流された。その後、吉野氏は壱岐に赴いて定着し、壱岐氏を継ぎ壱岐社家棟梁となって今に至るといふ。この吉野文書の記述は、歴史と伝承とが混交されているようだが、ここで注目されることは、吉野氏となった淡路守の周辺に社家、山伏、僧侶が存在していたことで、下部氏が神道、仏教などの様々の宗教をも包含していたらしいことが見て取れる。吉野氏が亀卜を行ったという確証は認められないが、吉野家に江戸時代の亀卜手引書である亀卜相伝記なる一書が伝えられているところから、吉野氏が壱岐下部の伝えた亀卜習俗を継承したであろうことは推測される。そして、前述した聖母神社の宮司は代々吉野氏が勤めており、その所持する系譜によれば、その祖先は雷大臣や壱岐直氏に行き着くとされる。壱岐氏の末裔が聖母神社の宮司で、神功皇后伝承に関わっていることは看過できない。

五、壱岐住吉神社、箱崎八幡神社と荘園

聖母神社の名は延喜式には見られないが、鎌倉期の正平二四年（一三六九）の壱岐神領図に聖母大明神として可須郷之内九十四町、永祿十年（一五六七）に香椎宮神領五町余、壱岐名勝図誌に聖母香椎宮と、香椎宮の名でも通用していた。これは壱岐の神社が平安朝以降、本土、特に筑紫地域の神社によって荘園化された結果に伴うもの

とされる。前述したように、壱岐に限らず、九州各地に点在する聖母神社が筑紫香椎宮の莊園に由来することは既に説かれているが、壱岐においてはそれらが聖母神社に特徴的なことではない。

周知の通り、壱岐にはその地域の割に延喜式内社が集中しているが、その中で神功皇后伝承に関わる住吉神社を取り上げる。

壱岐国続風土記によれば、住吉神社の社記には次のようである。神功皇后三韓出兵の時、郷ノ浦の御津浦に上陸し、足形を石面に印したことにより、その海辺に住吉大神を鎮座した。後に神託で波の音の聞こえぬ地を選んだこと¹⁷によって、現在地に移り、皇后の臣安倍介丸に祭らせたという¹⁸。先程も参照した正平二四年（一三六九）壱岐神領図に壱岐七社の中、住吉を除く六社が武家の私領化が行われているのに対し、住吉のみがそれを免れているのは、当社が筑前住吉宮に背景を持つ安倍一族の権威があったことによるとの山口麻太郎の見解¹⁹がある。また、住吉地域は和名抄には鯨伏郷として見えるが、当社に因んだ地名に改名しており、これも筑前住吉神社による莊園化の影響と言える。そして、神功皇后に由来し、安倍氏によって始められたと伝える軍越^{くまこ}神事は異国調伏の儀式とされ、壱岐国神社誌によれば、壱岐国は三韓及び蒙古の襲来の入り口であるから、一年三度の軍越神事を定め、一、四、十月に三韓の方角に相当する戌亥に向かい、鉾を振るとい²⁰う。この神社誌の記述は明らかに元寇を踏まえており、当神事が元寇を契機に行われたことを示唆している。

当住吉神社の社記や神事が元寇を踏まえていると思われる根拠が更にある。八幡愚童訓が元寇を契機に成立したことは前述したが、当社の社記を読めば明らかに愚童訓、或いは前掲の聖母神社縁起などに基づいていることが分かる。当社の宮司の始祖と伝える安倍介丸なる人物は、初めに少し触れたことだが、当社の社記や愚童訓において異国から渡来した塵輪という鬼神を退治した時の臣下としても登場する。とすると、先の山口麻太郎が説く実在性のある人物というよりは、宮司の始祖として神話化された伝承上の存在と見なした方がよいのではないか。いずれ

にせよ、壹岐の住吉神社は元寇によってクローズアップされたことは間違いない。

壹岐においても、元寇により多大の犠牲者を出したことが諸書や遺跡を通して語り継がれていることは、改めて贅言するまでもない。壹岐国史によれば、最初の元寇、文永十一年（一二七四）の役の頃、壹岐の東北部瀬戸浦、梶原村が筑前箱崎八幡宮領となり、その後箱崎宮の分霊が勧請され、村名を箱崎村に改称したという。これも香椎住吉同様、筑前の神社によって壹岐が荘園化された一例である。また、芦辺町史によれば、箱崎八幡神社神殿棟札銘に「箱崎 八幡宮壹岐国壹岐郡月読宮釣瓶莊潮安郷」と記されていた⁽²¹⁾。潮安郷は和名抄にも見られる郷名で、これらから、山口麻太郎は前述の顕宗紀や三代実録貞観元年（八五九）に記載された月読神、延喜式神名帳の名神大社月読神社を箱崎八幡神社に比定する⁽²²⁾。当社は別に、延暦六年（七八七）男岳山に創祀されたのが始まりとも伝え、延宝四年（一六七八）に平戸藩の橘三喜の考証で月読神社は別に認定されたために、当社は式外社と見なされたが、祭祀は代々壹岐直氏を継承した吉野氏によって取り行われた。男岳神社、箱崎八幡神社、月読神社は現在別個に存在しているが、筑前箱崎八幡宮が勧請される以前はその三社は一体で、月読神の信仰が中心であったと想定される。そして、壹岐続風土記によれば、箱崎八幡神社の社記はこれまた、八幡愚童訓や聖母神社縁起とほぼ同種のものである。これは、文治元年（一一八五）石清水八幡宮の別院となった筑前箱崎八幡宮からの勧請、並びに、聖母神社と同じ吉野氏を官司とすることによるものと思われる。

壹岐の八幡宮としては、他にも石田町管城^{つっさき}に白沙八幡神社があり、神功皇后の船に因む碓石や皇后腰掛石など、神功皇后に関する伝承が伝えられている。当社を三代実録貞観元年（八五九）正月二十七日条の海神に、また、延喜式神名帳の石田郡十二座の一つ海神社に比定する説がある⁽²³⁾。鎌倉中期以降の石清水八幡宮文書に当社に相当する管城社、八幡宮の名が見え、当社が石清水八幡宮の神領となり、その社僧のいた弥勒堂は宇佐八幡の弥勒寺の寺領となっていたとされる。当社やその周辺に伝えられている神功皇后伝承は、石清水八幡宮や宇佐八幡宮の所領となっ

たことから生成したものと考えられる。

壱岐には八幡宮に限らず、特に中世以降、荘園や寺社の領地とされた地域が多く見受けられ、その点で対馬と一線を画している。石田郷内の薬師丸は鎌倉後期に、先に取り上げた肥前松浦郡鏡神社の宮司草野一族の所領となり、建治二年（一二七六）草野氏の後家の尼長阿に池田屋敷（現石田町池田）を与えたとされ、池田地区には肥前加部島にある宗像神社系列の田島神社がある。鏡神社も前述したように神功皇后を祭神とするゆえに、その宮司家の所領の拡大は、とりもなおさず神功皇后伝承の広がりをもたらしものとなる。筑前、肥前と壱岐は距離的にも信仰的にも近親関係にあることは贅言を要しない。

六、壱岐における他の神社の荘園化と神仏習合

前掲の壱岐の箱崎八幡神社が磯山権現との別称を持つように、壱岐の神社の中にはかつて権現の名称で呼ばれていた所も幾つか見られる。

芦辺町諸吉にある高御祖神社は、延喜式にもその名が記されているが、延宝四年（一六七六）、橘三喜により熊野権現と称していた社が式内社と認定されたものである。壱岐に高御祖神社が設置された経緯としては、これも前掲の顕宗紀三年に月神が我が祖とした高皇産霊を祀ったことによるとされる。ただし、式社略考には、高御祖神社は箱崎村にあり、八幡神社の別殿に高皇産霊尊を祀るとし、壱岐国神社誌によれば、箱崎八幡神社の祭神の中に、天月神、高皇産霊神が含まれており、本来の高御祖神社は、月読神社とともに、箱崎の地に存したことも考えられる。

壱岐に限ったことではないのだが、延喜式などに見られる古社を、その後の、或いは現在のどの神社に比定する

かという調査が特に江戸時代から行われた。杵岐では延宝四年に橋三喜によりなされたが、その調査研究は今ではかなり修正を加えなくてはならないものが多いと指摘されている。⁽²²⁾ その中の一つに、延喜式内社の兵主神社に関して、橋は現在の聖母神社を当て、延宝年間以前は日吉山王権現と称されていた社を聖母神社と査定したが、その後、箱崎八幡神社の宮司吉野氏の意見を取り入れて、現聖母神社と、芦辺町深江の旧日吉山王権現を兵主神社と改め、杵岐国神社誌が従っている。それに対し、山口麻太郎は兵主神社を勝本町本宮の久栄八幡神社（旧号本宮八幡）に比定し、永留久恵が支持している。⁽²³⁾ 聖母神社縁起は、神功皇后三韓出兵の時、住吉大明神出現し神力を添えたことにより、住吉大明神を兵主神社と号すと伝える。ここでは、どちらの比定が正鵠を得ているかを検討するよりも、延喜式の兵主神社をめぐって、住吉神、八幡神、そして日吉山王権現などが交差していたことに注目すべきである。なぜなら、そこには、この神社に留まらずに、古社一般が抱え込まざるを得なかった、荘園化などに伴う信仰の変容による他社との競合や、仏教など他の宗教との習合という歴史上の問題があぶり出されているからである。

同様のことは前述の箱崎八幡神社などでも見られたが、他の神社、例えば、杵岐一の宮とされる天手長男神社などにおいても言えることである。当社も延喜式内社で名神大と記され、延宝四年に現郷ノ浦町田中の地と認定されたが、その時に発見された石造弥勒如来坐像には延久三年（一〇七一）の銘文があり、杵岐における神仏習合を認する最も古い資料と言われる。当社の祭神の中に神功皇后は含まれていないが、杵岐国神社誌が引く由緒によれば、神功皇后三韓征伐の時、功をなしたことで皇后自ら祀ったものと伝える。一方、宗像大菩薩縁起には、神功皇后新羅出兵の際に、宗像の神が異国征伐の旗竿という御手長を振って敵を翻弄したので、帰還後その御手長を沖ノ島に立て置いたと記されている。またその際、宗像鐘崎の織幡大明神が赤白二流の旗を織り、宗像大明神の御手長に付けたという。宗像織幡神社の祭神の中には杵岐真根子が祀られており、その社家が杵岐氏であったところから、杵岐と宗像の繋がりが想定される。⁽²⁴⁾ 土地領有面においては、観応三年（一三五二）、石田郷が筑前宗像社大宮司の

所領となり、文和四年（一二三五）以降は宗像氏に伝領されている。壱岐と宗像との信仰面における交流も、或いは右のような土地領有が関係しているとも考えられる。

山口麻太郎は別に、天手長男神社の所在地に関して、神名品書に、当国一の宮興こゝろに印鑰いんぎょ大明神、二の宮勝本聖母大明神とあるのを根拠に、神功皇后などを祀る芦辺町湯岳興の興神社、別号印鑰いんぎょ大明神とする説を提唱し、永留久恵も賛同している。²³ 山口は興という地名は国府であろうと推定する。壱岐国府の地は諸説あり、いまだに確定に至らないが、興も有力地の一つである。ただそれよりも興味深いのは、今引いた神名品書なるものは、修験僧や両部神道の神人達が神寄せ（諸神招請）に読誦する径文であったことである。ここにおいても、神社に修験者達が関わっていたことが確認される。

結

以上、肥前北部から壱岐における現存する神功皇后伝承を取り上げて来たが、それらをまとめ、如何なることが分かったかを述べる。

肥前北部松浦地域における神功皇后伝承は、古代からの交通路に沿って、記紀、風土記に基づきながらも、それらに見られない土地の伝承や元寇などの歴史の記憶と重層しつつ生成されていった。壱岐における皇后伝承も、同様に古代の交通路に従って広がっているが、特に、九州北部の八幡関係神社の荘園地化に伴ない、元寇などによる戦いの歴史と、それを契機として成立した八幡愚童訓などの八幡縁起類の影響、更に、江戸時代の調査による古社再発見という気運を受容して、土地独自の伝承が育まれていった。そして、その伝承の背景には、卜部系の神道や修験を含んだ宗教実践者の関与が想定される。それは、肥前北部の皇后伝承にも垣間見られたが、肥前北部の場合

は記紀、風土記という古代の文献に依拠して中世、近世の伝承が語られたのに対し、壱岐ではそれらの古代文献に記されていない分、中世、近世中心の伝承という側面を持つ。但し、壱岐においても、万葉集卷十五の遣新羅使人等一行の辿った交通路と神功皇后伝承とが重なっていることを考慮すれば、壱岐の神功皇后伝承は中世、近世における作り物とばかりは言えないということになる。いずれにせよ、肥前北部、壱岐に伝えられている神功皇后伝承も、大枠で言えば、古代、中世、近世の三段階のものが重層して今日に至っていることは疑いない。

注

- (1) 「神功皇后伝承―神功皇后と土蜘蛛・羽白熊鷲―」（『福岡女学院大学大学院 人文科学研究科紀要 比較文化』第二号 二〇〇五・三二）
- (2) 『佐賀県の地名 日本歴史地名大系42』（一九八〇・三 平凡社）による。
- (3) 『浜玉町史』六四〇ページ。
- (4) 神功皇后が八幡信仰の中で聖母と称されていたことは旧稿で触れた（『聖母の源流と生成―神功皇后と応神天皇―』『文芸伝承論―伝承のへをとこへをとめへ―』一九九八・一〇 おうふう）。
- (5) 『鏡山諸事情覚帖』（大宮司筆 明和四年 一七六八・三）
- (6) 『松浦古事記』（寛政元年 一七八九 『松浦叢書』第一卷 昭和九・四）
- (7) 『唐津市史』一一三四ページ。
- (8) 『佐賀県神社誌要』（大正一五年）
- (9) 柳田国男「目一つ五郎考」（『柳田国男集』第五卷）など。
- (10) 前掲書（注6）による。
- (11) 前掲書（注2）による。
- (12) 『神道大系神社編 壱岐・対馬』（昭五九・十二）に翻刻されている。
- (13) 須永敬「神功皇后をへ聖母」として祀る信仰―九州南北部における聖母神社の分析から―（『宗教研究』三三四号 二〇〇〇）

- (14) 『長崎県の地名 日本歴史地名大系43』（二〇〇一・一〇 平凡社）
- (15) 旧稿において、武内宿禰や中臣烏賊津使主いかづつのおみなどの従者が神功皇后などの伝承の語り手になることは論じた（注4）。
- (16) 壱岐卜部と亀卜に関しては、横山順「壱岐の卜部」（『勝本町文化財調査報告書』第7集 一九八九・三 長崎県勝本町教育委員会）が詳しい。
- (17) 須永敬前掲論文（注13）
- (18) 壱岐国続風土記は（注12）と同じ『神道大系神社編』に翻刻されている。
- (19) 『式内社調査報告書第二四巻 西海道』壱岐嶋住吉神社の項目。
- (20) 『壱岐国神社誌』（昭和一六・五 長崎県神職会壱岐支会）
- (21) 前掲書（注14）による。
- (22) 前掲書（注19）の当該神社の項。
- (23) 前掲書（注19）の当該神社の項、『日本の神々 神社と聖地1 九州』（一九八四 白水社）の当該神社の項。